

# 大場印刷 株式会社

●代表者/代表取締役社長 大場 寛治 ●創業/1950年  
●所在地/山形市立谷川二丁目485-2 ●URL/www.obainsatsu.co.jp

## CTP室の無人化達成 RIPフロー中心に業務組立てる



土屋取締役

大場印刷(株)は、昭和25年創業の歴史ある企業だ。経営理念「五感に響くコミュニケーション」を追求し、時代のニーズを先取りした技術革新に取り組んできている。同社は2年前、富士フィルムグローバルグラフィックシステムズの「XMF」を更新して、CTP出力オペレーションの効率化、使用インキの削減対策などへの挑戦を続けている。

同社が「XMF」とCTP出力機の導入を決めた理由の一つは、CTP出力機の圧倒的な生産能力の高さだが、同社ではこれに加えて「XMF」をうまく活用することで、CTP出力専任者を配置しなくても仕事が流れるようにしているという。もう一つの理由に「Remote」の存在があった。「競合製品がある中で、最終的にXMFに決めたのは、Remoteの存在

が大きい。Remoteをデモで見たとき、操作が簡単で、利用者目線の機能が搭載されているため、いろいろな使い方ができると直感的に感じた。」と同社業務統括の土屋和浩取締役は語る。

XMFを導入した時、これは誰でもCTP出力の操作ができるシステムだという声が現場から上がってきたという。そこで同社ではCTP出力をデザイナーや校正、工務担当が行うよう進めたところ、製本加工に不慣れな人でも簡単に操作できた。また、これまではCTP室に居なければ出力状況が判らなかったが、今ではネットワークを通して制作ルーム内でチェックでき、履歴、トラブル状況も判るようになった。結果的にCTP室の無人化が達成できたという。

また、XMFに標準搭載されている機能の一つで



社員の意識に変化が

ある「インキ削減機能」は導入時にはどこまで使えるか半信半疑だったが、今ではなくてはならない重要な機能だ。この機能を活用して同社は印刷インキの削減に取り組んでいる。同社はオフセット輪転印刷機と枚葉オフセット印刷機の両方を保有しているが、輪転印刷機に関してはほぼ全ての印刷物でインキ削減を行っている。枚葉印刷機に関しては、その印刷物のバリエーションの多さがネックになっているため、印刷オペレーターがインキ削減機能を選び、空いている機械の版サイズを選択して面付けを変更し、版出力を行う予定だ。

「XMF」を導入してから制作部門の作業効率も飛躍的に上がった。

XMFのテンプレートを作る人間が一人いれば、オペレーションは誰でもできるので、今では制作のメンバーが当たり前のようにXMFを使いこなしている。また、ページ分割機能など、今まではDTPアプリケーションで対応していた面倒な作業が簡単に行えるため、作業時間が大幅に短縮しただけでなく、人的ミスもなくなった。さらには「XMF」を活用するようになり、同社社員の意識が変化してきたという。

通常デザイナーは印刷物を平面つまり2次元で考えるが、実際の印刷物は立体つまり3次元である。「XMF」の印刷シミュレーション機能を使うことで、デザイナーは印刷物の厚さや用紙の表裏の映り具

合を確認することができる。「デザイナーが最終完成物を確認できることで、デザインの品質が良くなっている。更には、デザイナーの仕事に対する意識も向上している」と土屋取締役。

「Remote」についても、これを利用して顧客との進捗状況が見えるので急な入稿を避けつつ予定に組み込むことができ、また、コストや時間短縮に寄与する等、顧客に喜ばれるサービスを提供できると考えている。例えば求人情報誌やスーパーのチラシの印刷などは、校正担当者が複数人いるため、校正担当者に届けるだけでも時間がかかる。そこを「Remote」の機能を使うことで、校正担当者全員に一斉配信できる。校正担当者も早く確認でき、メリットに繋がる。発注者側のメリットを提案できる「Remote」は、新規顧客獲得に一役買っているという。

土屋取締役は「Remote」や「インキ削減機能」など、ソフトウェアを今後さらに活用していくことで、さらに良い経営環境を作っていけると考えている。「以前ならば、印刷会社においては印刷機を中心に業務が回っていたが、今は違うと感じている。これからはRIPワークフローを中心に業務フローを組み立てるべきであり、そうすることで、世の中の変化に順応できる社員が育ってくれる」と、土屋取締役は語ってくれた。